

公 民

1 公民科の目標

Q なぜ、公民科の目標に「主体的に考察させ」という文言が加わったのか。

< 公民科目標 >

広い視野に立って、現代の社会について主体的に考察させ、理解を深めさせるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を育て、民主的、平和的な国家・社会の有為な形成者として必要な公民としての資質を養う。

公民科の目標においては、「主体的に考察させ」という文言が新たに加わっている。

これは、学習指導要領が、社会の変化に自ら対応する能力や態度を育成する観点から、生徒の主体的な学習を通して「見方や考え方を深める」とともに、「現代社会の諸課題と人間としての在り方生き方」について考える力を一層育てることを目指しているからである。

これを実現する具体的な内容として、課題を設定して追究する学習を重視することが特に示された。

また、このことは、評価においてもこれまでの考え方を必要を必要を示している。すなわち、評価にあたっては、知識や技能の到達度はもちろんであるが、自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などの資質や能力までを含めた学習の到達度を適切に評価していくことが必要となる。

2 課題追究学習

Q 課題追究学習は内容構成上どのように位置付けられたか。

公民科の各科目では、次の3つの項目で課題追究学習が位置付けられている。

現代社会

大項目(1)「現代に生きる私たちの課題」

「地球環境問題」、「資源・エネルギー問題」、「科学技術の発達と生命の問題」、「日常生活と宗教や芸術とのかかわり」、「豊かな生活と福祉社会」等から、地域や学校、生徒の実態に応じて、2つ程度を選択して取り上げ主体的に課題を追究させる。

倫理

大項目(2)のウ「現代の諸課題と倫理」

「生命又は環境のいずれか」、「家族・地域社会又は情報社会のいずれか」、「世界の様々な文化の理解又は人類の福祉のいずれか」を、学校や生徒の実態等に応じて課題を選択し、主体的に追究する学習を行う

政治・経済

大項目(3)「現代社会の諸課題」

ア 現代日本の政治や経済の諸課題

イ 国際社会の政治や経済の諸課題

ア及びイのそれぞれにおいて課題を選択して追究させる。
<アに例示されている諸課題(9)>
「大きな政府と小さな政府」、「少子高齢化社会と社会保障」、「住民生活と地方自治」、「情報化の進展と市民生活」、「労使関係と労働市場」、「産業構造の変化と中小企業」、「消費者問題と消費者保護」、「公害防止と環境保全」、「農業と食料問題」
<イに例示されている諸課題(6)>
「地球環境問題」、「核兵器と軍縮」、「国際経済格差の是正と国際協力」、「経済摩擦と外交」、「人種・民族問題」、「国際社会における日本の立場と役割」

ただし、ここで重要なことは、課題追究的な学習をこの単元でのみ行っているだけでは、生徒の考える力を伸ばすことにはなお不十分であるということである。

これらの単元以外においても、「知識を一方的に教え込みことになりがち」であった従来の授業を改善し、教師主導の課題設定や発問の方法を工夫するなどして、生徒が考える力を身に付けることができるようにしていかなければならない。

3 目標に準拠した評価

Q 観点別評価とは何か。

高等学校では従前から目標に準拠した評価（以下「目標準拠評価」とする）いわゆる絶対評価を中心としてきた。目標準拠評価は、目標の実現状況を捉えて評価する。しかし、教科・科目の目標は非常にトータルな実現状況を示しており、目標の達成度をいきなり評価するのは困難である。そのため、「評価にあたっては、目標をいくつかの質の違うものに分けてそれぞれの評価を行い、その後それらの評価を総括する」こととなる。前半を「観点別学習状況評価（以下「観点別評価」とする）」と言い、学習指導要領では「関心・意欲・態度」「思考・判断」「資料活用の技能・表現」「知識・理解」の4観点が示されている。後半は「観点別評価を評定に総括する」手順となる。

Q 目標準拠評価を行うための条件は何か。

目標準拠評価を行うための第1の条件は、学習指導のねらい（目標）が明確になっていることである。このねらいは、「ある一定の意味のある内容のまとめり」に対するものであり、通常は学習指導要領の中項目レベルとなる。

第2の条件としては、「学習指導のねらい（目標）が実現された状態が具体的に想定されている」ことであり、これが「評価規準」となる。この評価規準は、内容的には学習指導要領と解説に基づき作成することができるが、各学校ではそれぞれ学習素材や実情が違うのだから、授業で取り上げる教材の違いや学習指導のねらい（目標）の違いを反映した学校ごとの評価規準を作成する必要がある。

第3の条件としては、「評価方法・手段が事

前に準備されている」ことである。目標準拠評価では、ねらい（目標）の実現状況を評価規準に照らして測定するのであるから、評価規準と評価方法・手段をセットにして事前に準備しておくことが必須の要件となる。

また、「どこで評価を行うか」（評価場面）ということも大切となる。これは「指導計画と評価計画をセットで作成する」ということであり、「年間指導計画や単元指導計画に評価場面と評価方法・手段をきちんと位置付ける」ということになる。

Q 目標に準拠した評価に対応するためには、授業では何が大切となるか。

目標準拠評価に対応した授業づくりで大切なのは、「何をするのか」、「何ができればいいのか」、「何が分かればいいのか」などが単元や授業の冒頭で生徒に示されていることである。

ただこの場合にも、「で情報を収集し、ワークシートにの理由について自分の考えが書けること」などという形で、学習テーマは可能な限り具体的に提示したい。なぜなら、生徒にとっては「何が評価されるのか」が大きなポイントであり、関心事となるからである。

この他に、学習活動の過程における評価も大切である。これは、生徒の学習活動を励ましたり、修正する役割がある。その形式が自己評価や生徒同士の相互評価であったとしても、「指導と一体化した評価」として効果的に機能する場合が多い。

4 観点別評価の在り方について

それでは、学習指導要領が示す「関心・意欲・態度」、「思考・判断」、「資料活用の技能・表現」、「知識・理解」の各観点からの評価はいかにあるべきだろうか。

Q 「関心・意欲・態度」の観点による評価はどうあるべきか。

この観点は学力の情意的側面を評価しなければならないことから、数値的評価や客観性の確保をどうするかなどの課題があり、他の観点に比べて評価しにくいものとなっていた。

しかし、これからは平常点として評価するにとどまらず、学習前と学習後の変容の度合いを測ったり、「疑問に思うことや調べてみたいこと」を書かせるなど、その評価方法や手段に一層工夫する必要がある。「科学技術と生命の問題」を取り上げたある授業では、「(最近便利になったことを)自分で考えたり、親や祖父母から聞く」という学習活動から評価情報(評価のための資料)を得ている。

その他には、あるテーマに関する「調べ学習」において、できるだけ多くの「調査方法と調べるべき資料名」をあげさせることによって、課題に対する関心や意欲・態度を評価しようとする試みなどがある。

Q 「思考・判断」の観点による評価はどうあるべきか。

この観点からの評価は、これまで一般的に文章表現問題により行われてきたため、国語力と不可分なものと考えられがちであった。また、採点基準の難しさ、採点時間が長くかかるなどの現実的な問題があるため、量的にも制限される傾向があった。

しかし、これからは「生きる力」の育成をめざす学習活動を展開するために、これまで以上にこの観点を重視する必要がある。具体的には、従来実施されてきた文章表現問題のみならず、グラフや図表の読み取りと関連づけた問題を工

夫するなど、一層の努力が必要である。

Q 「資料活用の技能・表現」の観点による評価はどうあるべきか。

情報の検索、処理により適切な資料収集を行い、その見方や有効な活用の仕方を身に付けさせることは、公民科の目標である公正なものの見方や考え方を育成する上での基盤をなすものである。評価にあたっては、次のような学習活動をとおして、生徒の資料活用能力や表現力をみるなど、一層の工夫をする必要がある。

- ・ある事象についての仮説を検証するために、複数の資料から必要なデータを選択させる。
- ・問題点や背景を考えるために、図やグラフ、表などのデータから特徴や傾向を読みとり、まとめさせる。
- ・まとめたものを、生徒がもっとも効果的と考える方法で表現させる。

Q 「知識・理解」の観点による評価はどうあるべきか。

平成12年12月の教育課程審議会答申においては、「知識・理解」について「単に覚え込むものにとらえるのではなく、児童生徒が自ら体験し実感をもって学ぶことにより、学習や生活に生きて働くものにとらえる必要がある」と述べている。このことを踏まえるならば、この観点のポイントは次の2点となる。

すなわち、「現代の社会的事象と人間としての在り方生き方とにかかわる基本的な事柄を理解し」、「その知識を身に付けている」ことである。

は、「公民科としての基本的な事柄について理解がなされているか」ということであり、

は、「その理解した内容を生きて働く知識として自らの中で体系化し身に付けることができたか」ということである。

5 ペーパーテストの改善

ペーパーテストの改善も評価方法を開発する一つの有効な手立てである。ペーパーテストはすべての生徒にほとんど同じ条件で実施できるものであり、知識・理解を中心に達成度をはかる評価方法・手段として最も利用されてきた。

しかし、4 観点に基づく評価を考えてみる場合、ペーパーテストの内容の改善が不可欠であろう。授業改善が進んでいるにもかかわらずペーパーテストがもっぱら「知識・理解」を測る手段としてしか機能していないのは大きな問題である。

今後は、「知識・理解」以外の観点、とりわけ「思考力・判断力」を測る手段として、ペーパーテストを工夫することが必要であろう。

〔思考・判断を問う問題例〕

高齢者が公共交通機関を利用する際に活用されている敬老パスが財政難を理由に廃止されることについて議論されています。次の問に答えなさい。

問1 あなたはどうすべきだと思いますか。

問2 なぜ、あなたは問1のように考えましたか、その理由（根拠）を書きなさい。

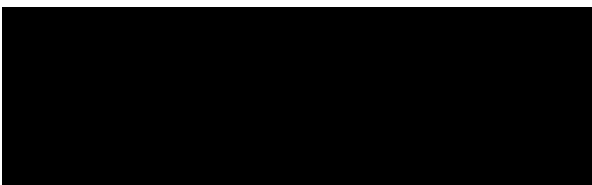
問3 問1の結論を出す前にどのような立場に立って考えましたか。

問4 問1の結論と反対の立場になって考えると、反対の理由としてどのような意見が考えられますか。

6 観点別評価を評定に総括する手順

観点別評価を評定に総括する手順についても、様々な工夫が必要である。

「単元ごとの観点別評価」の趣旨を最大限に生かす方法としては、ABC で表現された各観点別の単元ごとの評価を評定に総括する方法が考えられる。以下はその簡略なモデルである。



しかし、小学校等で多く用いられているこのモデルを使用すると、定期考査を実施する科目においては、定期考査の集計を単元別・観点別に行い、さらにそれを ABC に換算するという煩雑な作業が必要となる。

このため、本来の、「単元ごとの観点別評価」の趣旨からいささか逸脱するが、理想的な評価を確立するための過渡期の便法として、次ページに示したような、数値換算型の総括方法も現実的な工夫であるといえよう。

7 まとめ

以上、目標準拠評価の在り方を中心に述べてきたが、評価にあたって最も注意しなければならないことは、「評価を重視するあまり授業が疎かになること」や「評価のための授業となること」である。

いうまでもなく、1時間の授業は様々な学習活動で構成され、単元での学習活動はさらに多様である。重要なことは、「個々の学習活動は学習指導のねらいを実現するために行われるものである」ということである。したがって、どのような学習活動を行うかは、当該単元に対応する学習指導要領の内容、内容の取り扱い及び分野の目標を踏まえることが重要となる。要するに、評価は「評価場面が多いほどいい」のではなく、「そのねらいの実現状況をみるために最もふさわしい評価場面が十分検討されていること」が非常に大切になるのである。

このように考えると、評価場面をどう設定するかは、実は「目標やねらいをどのように分析しているか」、「それに対応した授業展開が想定されているか」、「その授業展開に対応した評価場面と評価規準が準備されているか」であるといえよう。

【評価から評定への総括の例】

次ページの年間計画（全体の一部）をもつ「現代社会」においては、次のような、補助簿とそれにもとづく評価から評定への総括が考えられる。（前期分のみを掲載）

補助簿1（場面ごとの評価の記載する補助簿）の説明

単元（題材）ごとの学習など、あらかじめ「指導と評価の計画」によって実施を予定していた評価の場面ごとの評価記録である。

略記号は、それぞれ、【関】＝関心・意欲・態度、【思】＝思考・判断、【技】＝技能・表現、【知】＝知識・理解 を意味する。

【関】・【思】・【技】については、A（充分満足できる状況）・B（おおむね満足できる状況）・C（努力を要する状況）で評価している。

【知】については20点満点の小テストの点数をそのまま示している。

中間・期末考査については、素点をそのまま数値で示している。

前期評価の補助簿1（評価場面ごとの評価の記録と観点別の集計）

番号	氏名	第1部課題						第2部第1章青年					第2部第2章経済と福祉					発表・机間指導	中間考査	期末考査	小テスト											
		科学技術 聞き取り調査	科学技術 発表資料	科学技術 発表評価表	科学技術 今後の意見	社会福祉 問題点の把握	社会福祉 資料作成	社会福祉 発表評価	社会福祉 課題発見	大量生産と画一化	ボーダレス化の調査	日本の高齢化社会の問題点	青年期とはアンケート	心理テスト考察	帰納法と演繹法の違い	日本人とは何か	日本人は無宗教か				現代日本の経済の様相	最近の企業の動向レポート	規制緩和についてレポート	資本主義と社会主義の相違	パブルとは何か	この15年間の経済レポート	なぜゼロ金利	討論財政・金融の問題点	小テスト	小テスト	小テスト	
		関	思	技	関	関	技	関	思	思	思	思	思	技	技	関	思	思	関	観	テ	テ	テ	知	知	知						
		P	レ	P	P	P	レ	P	P	質	レ	質	ア	P	質	P	P	P	レ	レ	質	質	レ	質	P	観	テ	テ	テ	知	知	知
1		A	A	B	B	B	A	A	C	B	B	A	A	B	B	B	A	B	B	B	B	A	A	A	B	B	85	75	15	20	18	
2		B	B	B	B	C	B	B	B	B	B	A	B	B	B	A	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	65	55	8	12	15	

註1 評価項目最下部の記号 Pプリント 質質問紙 レレポート アアンケート テテスト 観行動観察
 註2 「発言・机間指導」等の欄は、この補助簿とは別に、出席確認簿などに、授業中の優れた発表などを評価・記載して、前期・後期ごとにABCで示している。

補助簿2（補助簿1から前期評定を算出するための補助簿）

補助簿1の各観点別の評価を点数化。

各学校ごと教務内規等で決められている換算表により、10段階・5段階評定に換算

前期評価の補助簿2

番号	氏名	【関】	【思】	【技】	【知】	定期考査			合計 評定 点数 ÷5	10 段階
		換算 点数	換算 点数	換算 点数	換算 点数	中間	期末	換算 点数		
		80	80	80	60	100	100	200		
1		70	73	57	53	85	75	160	83	
2		50	67	49	35	65	55	120	64	

・補助簿1の【関】【思】【技】をA=3 B=2 C=1として点数化。満点は以下のとおり。
 【関】8項目=24点 【思】10項目=30点
 【技】6項目=18点 【知】小テスト=60点
 ・これを左表の80:80:80:60に換算。
 例 【関】は、個人合計点数×80÷24
 ・定期考査については、単に知識理解を確認する問題だけではなく、技能・表現、思考・判断を問う問題を含めることとし、但し、全体として、考査独自で点数を集計。
 ・この結果、左表の換算点数の合計は、500点となる。評定判定点数はこれを5で割って100点としている。

・評定判定点数は、各学校の規定に従い評定へ換算。

例 100~90=10 89~80=9 79~70=8 69~60=7 以下略

< 特色及び課題 >

長所...これまでの普通の高校で行われていた評価方法の発想から大きくずれておらず、扱いやすい方法となっている。

課題...観点別の視点からの評価という形にはなっているが、評価規準を設定した評価の道筋が途中で失われている。説明責任の合理性(貫徹)という点からは、無理がある。

【現代社会 年間計画】

目標 【学習指導要領】	人間の尊重と科学的な探究の精神に基づいて、広い視野に立って、現代の社会と人間についての理解を深めさせ、現代社会の基本的な問題について主体的に考え公正に判断するとともに自ら人間としての在り方生き方について考える力の基礎を養い、良識ある公民として必要な能力と態度を育てる。
到達目標に向けての具体的な取り組み 【評価規準を念頭に置いた指導上の留意点】	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が興味・関心を持って意欲的に授業に取り組むことができるよう、導入として、身近なテーマを題材に調べ、発表する学習を冒頭に実施する。 現代社会の基本的な問題と人間に関わる課題を自己の問題・課題として考察することができるように、世界・日本・地域の具体例を取り上げながら学習を進める。 有用な情報を主体的に選択し活用する技能を習得するため、随所に情報機器を利用した資料収集を実施し、加えてその資料の加工、発表を通して論理的な思考力が身に付くように配慮する。 定期考査においても観点別に問題の作成を行い、知識理解のみならず思考力、表現力も評価できるような方法を工夫し、生徒の多面的な能力評価を行う。

月	単元名	使用教科書項目(東京書籍『現代社会』)	主な学習活動(指導内容)と評価のポイント	評価方法
4月	第1部 現代に生きるわたしたちの課題	はじめに スキル . メディアを読み解く スキル . 課題の設定と調査計画の立て方 調べよう・考えよう	<ul style="list-style-type: none"> 1時間目の導入部分でのアンケート。 第1部で実施する課題追究学習の説明。その導入として新聞の読み方、テレビの見方について考える。 スキル については と関連させて実施する。 科学技術の功罪について、生命との関わりで考察する。 わかりやすくまとめた発表をすることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 発表を評価 収集資料提出 発表作品を相互評価、自己評価
5月		科学技術の発達と生命 豊かな生活と社会福祉の在り方		
6月	第2部 第1章 現代の社会生活と青年	1 現代社会の特質とわたしたちの生活 大衆の時代 情報化の進展と生活 国際化のなかの人間 少子・高齢化社会を迎えて	<ul style="list-style-type: none"> 現代社会の特質としての国際化、情報化、高齢化について 身近な事例を通して理解する。 特に少子・高齢化については、県内の地域的事例を例にあげてその特質を理解する。 自己を見つめ直すアンケートや心理テストを実施しながら 友人、家族、学校、社会などとの関係を考察する。 考査では、調べ学習において身につけた表現する力を見る 問題も取り入れる。 	<ul style="list-style-type: none"> プリント確認 収集した地域事例を評価 プリントの意見を確認 観点別考査問題で評価
7月		2 現代社会と青年の生き方 青年であること 社会とのつながり 生きがいと進路の創造 <前期中間考査> テスト返却 青年期に関するビデオ視聴 3 よりよく生きることを求めて よく生きること 近代科学の考え方 人間の尊厳 日本人のものの考えかた 外来文化の受容と日本の伝統思想		
9月	第2章 現代の経済と国民福祉	1 経済のしくみ 技術革新と産業社会の変化 現代の企業 市場経済のしくみ スキル . わからないことを調べるには 国民経済の活動水準	<ul style="list-style-type: none"> 現代の企業の持つ特徴を多面的に考察する。 市場経済の仕組みを身近な事例に置きかえて考察すること で今の日本経済の状況を新聞等の資料を通して理解する。 第1部で発表した作品の再考察を夏休みに行う。 	<ul style="list-style-type: none"> プリント確認 収集した資料を評価 小テスト
		2 政府の経済的役割 市場と政府 財政と財政制度 金融の役割 3 変化する日本経済 高度経済成長と産業構造の転換 経済のバブル化とその崩壊 日本の財政問題 金融の自由化と国際化 <前期末考査>		